

三秋の目標 美しく、気高く、堂々とあれ!!



「一秋の実り」続編

## 「三秋」で登る猪犬の頂点①

田宮 治

### 当然の常識

「知っている、知っている。そんなことは当たり前」

実は、この「当然の常識」がなかなかの曲者である。「猟常識」といわず、世の中の常識までもすんなりとはいかないようだ。

最近の報道で驚かされる若者の人生観や政界の常識。特に目につく食品問題での常識と、数え上げれば限りがなく、何とも情けないもので、世界規模の連鎖危機である。

追い打ちをかけるように悪化してきた地球温暖化と、それに伴う自然破壊。世は正に人類存亡の危機である。

そんな時でも、大國から個人に至るまで自欲に走り、国益を優先している。だからといって、それこそ猟人ごときがどう叫んでみたところで、どうなるものでもない。

昔から「猟人は森の番人」といわれてきた。それならばせめて「森の番人」に今こそ徹すべき時

である。われわれ一人一人が自分でもできる、目の前にある猟道の行く手を塞ぐ「物」・「事」を切り開き、われこそは「猟道の番人である」と自覚して、大切な狩猟を守っていききたいものである。

### 猪犬の常識

世の常識と同じように、「猪犬の常識」も人それぞれで、千差万別であるようだ。狩猟の常識だっ てまったく同じである。基本的には誰がどのように考えようと、どう実践しようともまったく自由であり、何の問題もない。

しかし、自己満足はあくまで自身が実践している時の話であり、それを超えた次元で人様に教えた り、説こうとするのであれば、その常識は限りなく高いものでなくてはならない。

ましてや、批判するのであれば、それこそ猪犬観であっても、狩猟常識でも、その極限が要求されると思うのである。どこまでも正しいことで、決して間違っていない。はならないからである。

こんなことを前提に、あくまでも俺流の猪犬観と、実戦を通して猪猟を記述してみたい。

ごく一般的には、猪犬といったところで特別な犬ではない。仔犬の時は動くもの、虫から始まってヤマドリでもタヌキでも何でも興味を示し、追いまくり、捕まえようとするものである。

獵人だって、初めはスズメを空気銃でやったのが始まりで、ハトからキジ、そしてヤマドリにと移行するのが大方のパターンであるようだ。

その先に大物獵があるというのではない。けれども、少なくとも猪犬作りや猪猟を見事に完成させたり、成功するためには、前記の体験を嫌になるほど積み重ね、多くの失敗を繰り返して覚え込まないことには、とても一足飛びにできることではない。

そんなことから、猪犬の常識も人それぞれの考えであり、どんな獵を実践するかによって猪犬観が大きく分かれるところである。

グループ獵で使う犬となれば、追跡犬が一番である。単独獵では

止め犬でなくてはならない。獵芸の違による獵方法の違いが、実は猪犬観になるのであって、どんなに天性の獵能を持っているからといって、初めから追跡犬になりたり、止め犬になるものではない。

早い話が、追い犬に付けて教えれば追い犬となる。止め犬に付けて訓練すれば止め犬となる。同様に、鳥で磨き上げれば立派な鳥獵犬ともなるのである。

どこまでも仔犬を信じ、目的の獵に適應する獵犬にすべく知恵と情熱をかけることである。若犬の成長に合った時々々の手順を尽して、名犬への道を限りなく登り詰めて、頂点を目指すことである。

### 獵芸は獵法で完成する

「一犬・二足・三鉄砲」の原理からしても、狩獵は犬と共にあるのが何より良いことで、どんな獵の醍醐味も獵犬次第であり、その成果も実績も素晴らしい獵芸で決まるのである。

見事な止め芸がきちっとできな

ければ、まず単独猪獵は成立しない。鹿獵ならば犬芸はただ鳴いて執拗に追い、追い切る犬であれば十分である。

主として、追跡犬を使って実践するのがグループ獵であるが、山を大きく取り囲むようにタツを置き陣を張るので、勢子長は二、三頭の獵犬とともに猪や鹿を上手に起こし、確実に追ってタツにはめ込めばそれで良いのである。

たとえ、出たものが猪であって、咬むことも、止め切ることにも必要のないことなのである。寝屋に犬が飛び込み強く鳴けば、必ず猪は逃げ出すものである（大猪は例外もある）。

つまり、グループ獵は獲物の逃げることを想定して、犬は追跡犬となるのである。しかし、単独獵では猪を発見しても、これを飛ばしたり、逃げ切られたのではどうにもならない。寝屋か、その近くできちっと止め切らないことには話にならない。

このように追跡犬と咬み止め犬では、実に大きな違いがある。作るのも、育てるのも、仕上げるの

だって、その手順や訓練方法はまったく異なるのである。

特に単独獵で知っておいたいただきたいのは、犬群の犬たちの中で、どの犬が先陣を切って猪に対して絶対に止め切れるまでの実力を付けているのかを知っておかねばならないことである。猪に対した時に止め切れない犬は、必然的に逃げる猪を追うことになる。この繰り返しは必ず追い犬となるからである。

同じことで、止めた猪でも逃げられてばかりとか、タツで撃ち獲っていたのでは、天性の止め犬といえども止め芸は甘くなり、きちっと止め置く一流芸は育たないものである。

そんなことから、単独猪獵の私がこだわっているのは、何歳になっても一人で簡単に猪の撃ち獲れる猪犬群の完成である。どんな荒猪でもきちっと止め置き、見事に撃ち獲らせてくれる猪犬群を仕上げるために、「三秋三獵期」をかけての挑戦で、その目的を達成しようと思っているとこころである。

一秋はすでに完遂。目下「二秋目」の猟期が近づき、「二ノ矢の若犬群」を特訓中である。

繰り返しになるが、私は名犬になつたり、見事な一芸をやり遂げたりするのは、すべて訓練によるものだと確信している。どのよう  
に訓練したら最良なのか、天性の  
猟能を限界まで伸ばすことを絶え  
ず考えて、改良と改革に努めてき  
たのである。

ややもすると、猟犬は本能で決まるものと勝手な理屈を付け、一流犬にならないことを本能の為せる技などで片づけたり、犬のせいにする。

猟方法も、旧態依然とした親方中心の大物猟に風穴を開け、新風を送りたい。そんなことも今回の大きな狙いで、三秋をかけた重要な課題の一つである。

ひと昔前の食うがための狩猟も、ここにかけては楽しみ、生きる支えとなるものでなくてはならない。

嫌な規則はできるだけ取り除き、何の気兼ねもなく自由に楽しむ。そんな単独猪猟と、何歳にな

っても一人で猪が獲れて、猟芸を見ているだけでもウキウキするよ  
うな単独猪犬群を完成させる近道  
を必ず見つけ出し、もって後世に  
続く猟人たちの道標としたい。何  
事においても改良・改革のないも  
のは滅亡につながるからである。

### 三秋の目標

単独猟の主役は犬だと思っ  
るので、ズバリ猪猟一本の名犬を  
作ることである。単独猪猟では、  
鳴いて止めようと、咬んで止めて  
くれようと、寝屋かその近くでき  
ちっと止め置く実力犬でなければ  
勝負にならない。

その上、どんな猪でも完勝する  
ことであり、怪我をしたり、命を  
落とすことのないよう創意工夫す  
ることである。

猪犬一頭で止め置ければ、それ  
に越したことはないのだが、私の  
体験から言い切れるのは、一頭で  
止められるのは鳴き止め犬だけで  
ある。私の犬舎ではクマ号とミス  
号、ラン号、ゲン号などである。  
ただ、そんな犬を使う猟人は、

よほど足に自信があるか、猟技術  
が出来上がっていないと、なかな  
か簡単に猪など撃ち獲れるもので  
はない。

一頭とか二頭にこだわってみた  
ところで、猪の獲れる確率である  
とか、怪我などの心配をしていた  
のでは、楽しむまでにはとてもい  
かない。どこまでも安心できる猪  
猟と、安全有利な猟法実践のため  
に私は犬群を使っているのではあ  
る。

当然のこと、一頭でも十分に使  
える一流芸の猪犬を一頭ごとに吟  
味し、全体的に調和のとれるよう  
に、また持ち味の芸を十分出し  
切るための犬群使用なのである。  
ネコのような犬を何頭引いてみた  
ところで、たやすく成果が出る世  
界ではない。

まして、一頭や二頭の犬を綱を  
つけて寝屋まで引き上げたり、猪  
を止め切れずに追って行ったきり  
であったり、遠くに行ってしまう  
ような猪犬では、とてもじゃない  
が、単独猪犬としては使えないも  
のではないのである。

第一には主人から離れないことで  
あり、戻りが良いことである。次  
に、何といっても鳴き声であり、  
大きな声で鳴き続けることが条件  
である。

そして、猪との戦いは、あくま  
でしつこく、決して逃げないこと  
である。猪との攻防では、何より  
もスピードと気迫が大切で、若犬  
時には一直線に猪の顔面に咬みを  
入れるのが一番である。

前にも説明したとおり、こんな  
若犬は三才くらいまで守ってやら  
なければならぬ。危険なところ  
があるけれども、将来楽しみな成  
長株なのである。

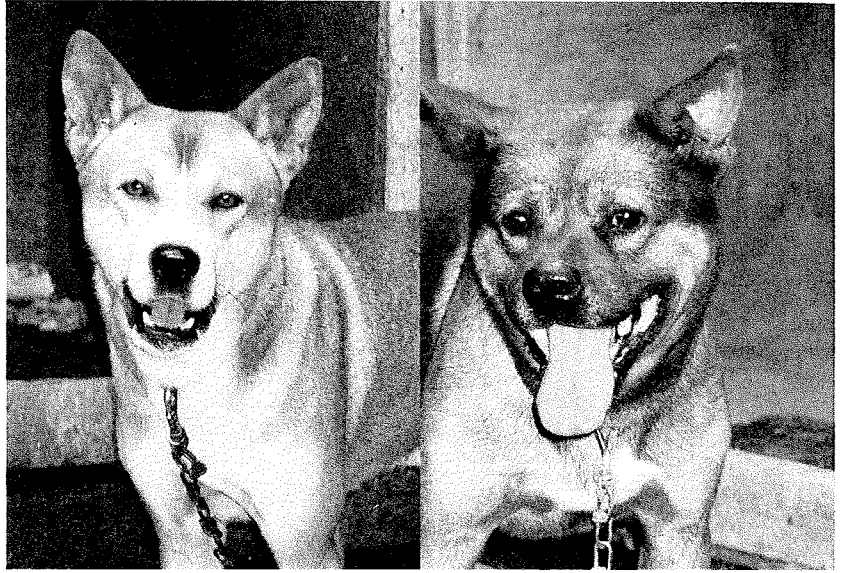
その成長株が見せつける芸域は  
多様で、実戦で勝ちを重ねるにつ  
れて、より安全で確実に猪を止め  
切る一芸を覚え、その芸を武器と  
して使うようになるし、猪が決し  
て逃げられない、絶妙な間がとれ  
るようになる。

### 天性のなせる技

#### 「絶妙な間」「射竦め」

その大切な絶妙な間であるが、

種牡太郎号（左）とケン号。つるの確さの証明



（左）今は亡き名犬ナン号とその仔クマ号。数知れない感動をもらった。猪を止めるのは、姿でも血統書でもない

（右）二秋（二ノ矢）のブイ号、カツ号、ナオ号。富士雄号の孫犬たちである。迷わず頭に咬み込む、強烈な「咬み一番犬」に成長。どの仔もそっくりで、私でも注意しないと見間違う



（左）もう名犬の域にあるゲン号と奈智号。二ノ矢の先犬も当然のことゲン号である



一軍犬ならば、いつでも猪は獲れた



(右) 二秋目(二ノ矢)のブイ号と千代号の頑張り。まだ六カ月と思えない、素晴らしい咬み込みをやっている。兄弟犬にカツと武蔵号がいる



(上)「三秋」に残しておきたい名台牝クロ号の仔犬たち。ちなみにヨシ号、ハヤト号、ヒデ号、キヨ号、トシ号は先胎である。この兄弟犬(牡牝)が河津の中辻氏に引き取られた

(左) 鳴き止めの名犬ナン号とクマ号。クマ号の兄弟犬に富士雄号がいた。みな一流芸で、私に「猪猟のなんたるか」を教えてくれた。特に富士雄号はたくさんの仔犬を残してくれた



ねで、会得した体験を基に、誰の目からもこれが一番の猪犬作りであり、訓練方法であることを三秋をかけ、俺流の猪兵法を実践していく中で明らかにし、分かっていただきたい。

どんなに優れた文献や、図書館などでは絶対に理解することのできない未知の領域を実戦と体験をもって明解したい。

正しかったであろう昔話や、立派な骨董品の類、血統犬の幻を立言、並べたててみても文化価値は別にして、私たち獵人にはほとんど関係ないことだと思っている。何事でも過去を偲んだり緇ひよとき、想い出を懐しむのは大切ではあるが、前進にはならないからである。目下の狩獵界にあっては、前進ただ前進のみである。

その前進も、創意工夫し、自ら切り開く勇氣ある挑戦である。やってもみないで何が分かるか、と言っておきたい。やってみればこそ、初めて物事の奥の真実が見えてくるのであり、次に打つ手段が生まれるのである。

実際に私たち獵人が今やらなけ

ればならないことは、骨惜しみしないで獵野に出て、欲しいもの、必要なものは自分の手で掴み取ることである。

何回となく言い続けているように、どんな素晴らしい論よりも、ただ一回の体験である。体験を重ねることで、望むもの、興味を持つものをどこまでも追っかけ、必ずその道の真実や頂点にたどり着くことだと思ふのである。

あくまでも私の存念ではあるのだが、身をもって実現したいのは三秋で出来上がるであろう、どこに出しても恥ずかしくない名犬群である。ただ一人で大群の一芸を楽しみながら、何歳になっても簡単に猪の獲れること。どんな大猪との戦いにも完勝できる。

つまり、猪犬というからには、猪が獲れることがやっぱり名犬ということになる。当たり前のことである。物事の成功や完成は、実戦で繰り返し繰り返し体験してきたことの産物で、目標を決めたら一つ一つ目の前のことを確実にやって、必ずやり抜く獵人の人格レベルこそが、頂点の高さを決定づ

けるものだと思っている。好きな良い猪猟を通して、人生を切り開いて行くことが狩獵道である。私はそのように思っている。

## 名犬への近道

とり立てて「三秋を見ろ」というからには、何もかも初めから、仔犬たちを実際に山に入れて仕上げる訓練からである。今、ある一流犬群の三秋など、どんな形で公開しても猪などは獲れて当たり前で、芸だって素晴らしいに決まっている。

誰の目からも名犬の域にある犬群を引き連れて名勝負をしてみても、出来上がった過去を記述しても、猪犬仕上げの真の技は見えてこないと思うし、面白みに欠ける。

手つかずの一胎の仔犬を、手順を尽くして山で磨くことで天性の獵能と血統の素晴らしさを証明し、もってどの胎の仔でもバラツキがなく固定していることを三秋三胎の仔犬たちで確かめたい。

そんな思いで犬群を構成したのである。まだ一軍犬群を引き連れて獵期に駆け巡っていた実戦の獵場で、残臭と狩り道があるうちに若犬群をゲン号に付けての特訓が始まったのである。

若犬といっても、まだあどけなさが残るチビたちである。小さい川を渡るのさえも怯えて鳴きの連発。

当然、崖などは登れない。山道をただ歩いていくだけの日が続き。汗まみれ、虫に刺されての暑い夏も過ぎ、秋風の吹く九月になって、ようやく猪に興味を示すようになってきた。虫からネズミ、小動物に鹿、動くものには何でも反応するが、無視し続けてきた。

ただ無視といっても、仔犬の時はおしなべて名前を呼び続け、よしよしの連発である。仔犬をその気にさせるには、褒めることが一番よく、大切なのである。

五つ褒めたら、一つくらいはダメ！これは犬同士の争いぐらいで、愛こそが要で、どんなことがあろうと三つ怒ってはならないのである。特に目的のもの（猪）に

付いた時は大げさに抱きしめ、褒めちぎることである。

単独猪犬の特訓といっても、何も特別なことを計画・実行しているのではない。あくまでも猪獵人として登ってきた猪犬作りの道をごく当たり前にやっているだけである。慣れた道を一一つ注意し、点検しながら、また登っているにすぎない。

振り返れば、なんだかんだで獵犬作りの道は六十年以上にもなる。それもすべて山に出て実践してきたことばかりで、言ってみれば登り慣れ、知り尽くした道程であるが、特に今回は三秋に三回登り詰めることにこだわったことで、一秋で立派な猪犬群に仕上げ、誰の目から見ても名犬群の基盤をがっちりと作らなければならぬ。

そんなことから、一番の注意点は早期教育を取り入れたことだ。当然のこと、綱や食餌でやる基礎訓練、急いで猪に当てる訓練は必要のないことなどに変わりはない。

ただ、三秋をかけてやるはずの

すべてを一秋で完了するのである。酷ではあるが、実践の場で実戦よろしく行うので、仕上げの総合点検を獵期におくように設定している点である。

急がば回れということも事実であるが、物事を語ったり、成功するのには当然のこと、その獵人に培われた実力ともいえるべき基本土台があるはずで、あくまでもその土台に立っての早期教育である。

したがって、早ければ良いとの考えから猪に当てることだけは十分に注意することである。仔犬に一度猪の恐怖心を植えつけたら大変で、以後は仔猪といえども見向きもしくなるもので、あたら天性の獵能もまったくだめにしかねない。

当然のように、だめ出しのレッテルを張る獵人も多いようであるが、基本的には何度も言うように、すべてがやってみて失敗して分かることなのである。その解決法もあるのだが、どんなことでも修正は訓練で、最も難しいこと、直るまでには長い時間と何倍

もの苦勞がつきまとうことになるのである。

こんな失敗も含めて、仔犬が大前になるまでには三秋くらいはかかる。思うようにできないからといってすぐにだめ出し、投げ出したりせずに、辛抱強く頑張つて、天性の獵能を残らず引き出す努力をしながら、「三秋を見る（見てやれよ）」というような教訓と思っているのである。

その「三秋」を今回のタイトルに使ったのは、仔犬仕上げの基本はあくまで「三秋を見る」であるが、私流にアレンジして、三秋に三回仔犬を連れて名犬の道を極めるということである。その仕上げの早さ、近道の構築と三回で実施、確認する正確さの立証である。

そして、一秋でできた獵芸や猪犬が三秋にはどんな素晴らしい一芸に進化し、堂々たる名犬に登り詰めたか。この辺のところを見極めながら獵野に引き、実戦の場で具体的に詳しく何度でも繰り返し挑戦している様子を記述していくことで、ひと昔前には誰も教

えてくれなかった猪獵方法や猪犬作りを、俺流ではあるのだが、分かってほしい。

そのために、やった、獲った、出来上がったではなく、どのタイトルを読んでもただいてもよく分かっていただけられるように、また面白くて参考になると思う一戦を実事ありのままに記述するよう努めている。俺流というからには、何もかも自分が使うためのものではないが、使ってみてこれが一番良く、便利で安全、そして安心、満足しているからこそ天下に示したいと思っている。

獵が趣味であったればこそ人生も楽しく生きてこれたし、犬キチであったればこそ真の猪犬が手元にある。

だから、気前よく自分でできたことを公開して、後に続く獵人の猪獵をやる上で猪犬作りで何か参考になったり、よいきっかけになれば最高だと思ふし、この歳になれば、これくらいは獵界に生きた者としての最後の奉公だと思っている。

(つづく)